

ランドスケープとのかかわり

田村裕希

筆者略歴

1994年 日本大学理工学部建築学科
(企画経営コース)卒業
1994～98年 東京ランドスケープ研究所
1999年 田村環境計画設立



大学時代の講義の中でも設計演習は、自分の建築に対する考えを模索する場として、特に真剣に取り組んでいたことが思い出されます。与えられたテーマに対してどのような切り口でデザインを展開していくか、皆がそれぞれ個性的な考えを持って熱く議論が繰り返られていました。例えば、外観デザインから、構造の新しい提案から、インテリアイメージから、と数多くの切り口がある中で、特に私は「建築と外をどう繋げるか」「建築を置くことによって周囲はどう変わっていくのか」といったように建築自体のデザインよりも、むしろその外側の状況を中心に考えを巡らせていました。就職を考えるにあたって、自分のそういった外部へのこだわりを活かせる分野として、ランドスケープの世界を選びました。

実際、足を踏み入れたはいいものの、ランドスケープに関する知識も経験も皆無に等しいまま、実務に携わることになったので、最初の数年間は、何をもとに計画が進められているのかを把握することだけで精一杯という状況でした。それまでは当たり前のように見えていた風景が、実は緻密な勾配設定や土量計算などをもとに出された「造成計画」や、地被・低木・高木と何層にも分け四季折々の表情を検討してつくられた「植栽計画」など、数多くの要素がバランスよく重ね合わされてできあがっているということに、実務を通して初めて気付かされました。

また、ランドスケープ設計として提示される敷地のスケールの幅広さについても、最初は戸惑いを覚えました。数十センチの隙間のような場所から何百メートルの広が

りのある空間まで、イメージをそれぞれ切り替えながらデザイン検討を行わなくてはならないはずが、最初はなかなかその感覚がつかめずにいました。そのため、図面と現場を何度も照らし合わせたり、先人の創り上げた作品を巡ったりしながら、実際に多くの空間を体感し、徐々に慣れていったように思います。

また、デザインに直結することではありませんが、空間の利用や仕組みを検討する仕事にも数多く出会いました。例えば最近では、「自然公園」という空間に対してどの位の人が滞留するのが適正なのか、といった「適正収容力」の問題に取り組みました。にぎやかなことがプラスに捉えられる都市空間とは違って、原生的な自然風景を楽しむための「自然公園」では、ある程度静けさを保つことがその空間の価値を高めることとなります。そのため、混雑に対する人間の許容量などからその場所の適正な密度を検討し、それをもとに利用調整を行うという取り組みです。このようなことになると、建築とは随分かけ離れた領域と思われがちですが、人間と空間の関係を調整＝デザインするという点においては同一線上にあるのではないかと思います。

私がランドスケープにかかわり始めて10年以上経ちましたが、まだまだ未知の領域や深めていかななくてはならないことがたくさんあります。学生時代に建築を通してランドスケープを思考していたように、これからはランドスケープを通して建築を思考し提案していけたらと思います。

(たむらゆき・ランドスケーププランナー)



文化学園軽井沢山荘外構設計
地形に沿ったアプローチデザイン
(建築：大成建設株式会社 写真：阿野太一)



東京都恩賜上野動物園広告施設デザイン
(実施コンペ)
当動物園初のPFI導入による施設整備



日光国立公園尾瀬地区
人間の数をコントロールすることによって風景を
保全する取り組み (写真：中内兵衛)